年	1977	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88
適中率	50	100	80	80	70	80	100	0	20	30	50	20

この予報では，1988年は“全国高温，干ばつ”となっている．大勢として今年の実況とはまるで反対の予報と言ってもよいのだが，6月全国高温の実況を考慮して，私は20点を与えることにしたのである．

この表を一見してわかるように，1983年までの適中率は平均して80点，未踏の超長期予報の成績としてはお見事と言ってもよいであろう．ところがこの成績は83年から84年にかけて途切れ，84年以後の適中率は平均24点，これでは全く実用にならない．84年以後は予報文の全く反対を予報した方が実状に近いのである．

さて，以上のようなことから，私はここで様々な条件の下で行われている現在の長期予報を全般的に批判しようとするのではない．私はこのように予想がまるで反対になったような時に，現在の気象の，何か本質的な特長が姿をあらわしているように思われてならないのである．

私は20年以上も昔，長期予報の現場を経験した者であるが，私自身，もし現在の予報官と同じ立場におかれたなら同じような見込みちがいをしたかもしれない．現在の気象は，過去の経験を絶するような経過をたどっているらしい．妙な言い方だが，むしろ天気の方が少しおかしいのではないかと私は考えるのである．そのおかしいことを具体的に示し，以後これを考慮することが長期予報開発の一つの重要な方法であり，異常気象探究の第一歩ではないかと思う．

私はこの問題について一つの私見を持っており，現在，印刷中のものがあるが，ここでそれを述べる前に，主として現場で仕事にたずさわっている人達から，なぜ大きな見込み違いが起ってしまったかを聴いてみたいのである．

その際，是非私が聴きたいことは，①実状の解析的説明や，②今まで知らなかった知識―たとえば El Niño がだめなら La Niña を考えるというような―をつけ加えることではなくて，③すでに現場で試みられた，どの根拠が全く予想外の見込みを与えてしまったのかということを，現在の技術批判の第一歩として具体的に示してもらいたいのである．

日本気象学会および関連学会行事予定

行事名	開催年月日	主催団体等	場所	備考
日本気象学会 平成元年度春季大会	平成元年5月24日 ～26日	日本気象学会	気象庁	Vol. 35, No. 12
理工学における同位元素 研究発表会	1989年7月3日 ～5日	同運営委員会	国立教育会館	Vol. 36, No. 1
Fifth Scienlific Assembly. IAMAP	1989年7月31日 ～8月11日	IAMAP (International Association of Meteorology and Atmospheric Physics)	Reading. U.K.	
International Conterence on Modelling of Global Climate Change and Variability	1989年9月11日 ～5日	Meteorologisches Institut der Universität Hamburg	ハンブルグ大学	
都市気候・建築・計画に 関する国際会議	1989年11月6日 ～10日	日本気象学会，日本建築学会 WMO, IAHP, IBP	京都国際会館	
日本気象学会 平成元年度秋季大会	平成元年11月7日 ～9日	日本気象学会	那覇市	